有り難き出会い

泉　潤一

京都に清水焼団地という所がある。元々清水寺周辺で発祥した清水焼であるが現在は清水寺の奥の山並みの中腹(京都市山科)を拓き窯元など清水焼の生産拠点を移転させた先をこう呼んでいる。

清水焼の伝統技法のひとつに「天目」と呼ばれるものがある。中国宋時代の中国禅宗の中心であった逝江省天目山に留学した僧によってその技法がもたらされたのが命名の由来だそうである。特徴は鉄分を含んだ釉薬により、焼成する際多種多様な光彩が表出することにあり、その特有な風合いが人々を魅了している。私は30数年前、黒地に銀色の斑点が浮かんだ天目のぐい呑みを買い求め永らく愛用してきたのだが数年前に縁が僅かに欠けてしまい、以来清水焼団地を訪れてみたいと思うようになっていた。

その機会は昨年8月にやってきた。丁度京都での仕事が早めに終わったため、その地に向かった。幹道から団地に入った直ぐに協同組合事務所があり、まずそこに立ち寄った。事務所は観光客のための案内所も兼ねており、1階に在住の作家の作品が展示されている。説明いただいた女性職員の方が「作家先生の工房を訪ねると喜ばれる先生もいらっしゃるそうですよ」と言うのを聞いた。これがいけなかった。生来の好奇心旺盛な性分が頭をもたげてしまったのである。展示品の中に独特な幻想的作品があり、このような作品を創り出す先生に是非会ってみたいと思った。事務所には案内図があり先生の工房も載っていた。なだらかな山道を10分ほど歩いた所にお宅はあった。奥さまが出て来られた。一瞬怪訝な表情が見て取れた気がしたが来訪の意を告げると先生を呼んでくださった。引き戸を開けると玄関の上がりが畳の間で、その中央に畳1枚分はある大振りな座卓が置かれており、そこに通された。抹茶をご馳走になりながら作品に惹きつけられたことを告げると「この茶碗がアンドロメダです」「?」アンドロメダとは深い漆黒の宇宙に点在する無数の星の光を想起させる表現技法をそう命名されたことを後から知ったが、恐らく先生はにわかファンであることを直ぐに見抜かれたのだと想う。現在までの経歴と先生が生み出された各種の表現技法を気取らぬ優しい口調で丁寧に教えてくださった。「名の通った作家の中には一旦確立した技法を変えない方が多いのですが、私は常に新しいものに挑戦したいんです。根が軽薄なんですよ。」と自嘲気味に自らを評された。しかしお話を伺ううちに私は軽率にお邪魔したことを恥じ入り額の汗を拭っていた。御歳75歳になる先生の作品は大英博物館、故宮博物館、ボストン美術館、京都迎賓館等名だたる所で所蔵されている大御所とも云うべき方であった。度々奥の工房から数個の作品を携えて戻られ、お話を聞かせていただいた。1時間半にもなろうとする頃、座卓の上は作品で一杯になり、私は突然押し掛けた非礼をお詫びし御いとますることを告げた。すると先生は3種類の酒杯を持って来られ「好きなものを持って行きなさい」と仰った。固辞すると「卸す前のものだから気にしないでください」と言って奥さまに1つを包むよう促された。それが写真の酒杯である。先生の代表的技法のひとつ天目宙によるその作品はあたかも深い藍色の宇宙に出現したオーロラのごとき光彩を放っていた。この杯でお酒を頂く度に、その時の白昼夢のような出来事と玄関の外まで一緒に来ていただき、いつまでもお見送り頂いた先生の優しい笑顔が甦るのである。